

華人の面子・日本人の面子

—— PAC 分析技法による日本人を対象とした調査の報告 ——⁽¹⁾

末 田 清 子
蔡 小 瑛

1. 調査の目的

日本政府によって提唱された「留学生 10 万人計画」を契機として、1980 年後半留学生の数は増加し続け、特に昨今アジア諸国から就学及び就労を目的として来日する外国人が急増している（馬越，1993；山崎・平・中村・横山，1997）。外国人登録者全体の過去十年間の推移を出身国別に見ると、韓国及び朝鮮が 1991 年末以降減少傾向にあり、フィリピンは横ばいとなっているが、中国系（台湾及び香港を含む）⁽²⁾ は大幅に増加している。留学生を出身国別に多い順に並べると、中国系が 55.9%，韓国及び朝鮮が 21.4% となっている。また、就学生については中国系が 66.5%，韓国及び朝鮮が 19.0% となっている（法務省，1996）。つまり、留学生及び就学生は圧倒的にアジア系であり、中でも特に中国系が多い。しかしながら、日本はこれらの留学生及び就学生の受入れに関して、制度的に“成功”しているとは言いがたく、個人的レベルにおいても、日本人との交友関係の難しさが指摘されてきたこと久しい。事実、欧米系及びアジア系留学生を対象とした調査において、欧米系留学生に比べてアジア系留学生の対日イメージはかなり悪い（岩男・萩原，1987，1988）。ビジネスの文脈においても、日本人が中国人及び台湾人など華人とビジネスを行っていく際の難しさは多々指摘されており、園田（1994）が指摘するように、欧米人に対して感じるような違和感を持ちにくいことが却って災いとなり、日本人と華人は互いに不信感を募らせていると言えよう。

近年このような趨勢の中で、華人⁽³⁾ と日本人の間に生じる対人関係における摩擦に焦点をあてた研究が見られるようになった。両筆者は、日

華間の対人コミュニケーションを研究する上で面子を重要な概念の一つとしてとらえ、各々研究を展開してきた。面子とは社会的達成により個人が世間から得る評判及び影響力である⁽⁴⁾ (例: Bond&Hwang, 1986,1996)。蔡 (1995) によれば、面子は儒教倫理において家に対する義務が具現化された結果及び過程である。つまり同氏は儒教思想に基づく華人の自尊意識としての面子を、親族に対する義務を果たそうとする「義務的自己」と、自分の選択によって自己実現しようとする「理想的自己」の統合の過程としている。

面子という概念はもともと中国との交流の中で日本に伝わった (井上, 1977)。儒教自体が中国から伝わり日本的なもの⁽⁵⁾ へと変容した (農, 1995) 経緯もあり、どのような意味としてどのように伝わったかはわからないが、面子に関する共通基盤を日華間で持っていることは確かである。しかしながら、面子が表出してくる状況が華人と日本人とでは異なる。末田の質的及び量的調査 (Sueda, 1995; 末田, 1997) によれば、華人は個人の能力の評価に関わる状況で、面子の意識を強く持ち、日本人は処遇に関わる状況で面子の意識を強く持つ傾向が見られる。

本稿では、上記の面子の概念の日華間における共通点及び相違点を踏まえ、その概念の構造をとらえる目的で、PAC (Personal Attitude Construct) 分析技法 (内藤, 1993, 1997) (以降文中では PAC と表記) により日本人二名を被験者として行った調査の結果を報告することを目的とする。

2. 方 法

(1) PAC (個人別態度構造) 分析技法

PAC (内藤, 1993, 1997) を本調査に適用した理由は、その主な特長四点に集約される。まず、PAC はその出発点がサンプリングではない。「個」の持つ豊かさを活かしつつその構造的普遍性に迫ろうとする試みである。PAC を含む質的な調査方法から得られた結果は、注意深い考察なしに結論づけられてはならない。かと言ってチェン及びピアース (Chen&Pearce, 1995) が主張するように、質的調査が量的調査を展開する際の二次的なものとして常に位置づけられるべきではないと思う。

これまで日本人と外国人との対人コミュニケーション等の調査に関して多くの量的研究がなされてきたが、高井（1989）も主張するように、質問紙を受けること自体が精神的ストレスになってしまう程、頻繁に調査対象にされている留学生も多々いる。動機（motivation）レベルの低い状態で回答せざるを得ない量的調査よりもむしろ、調査内容に興味を持ち調査に貢献する意欲ある対象者によって得られた質的調査によって、かなりのデータを得られることがある。

第二に、PACによって、その概念が包含する諸要因間の関係を考察することができるのみでなく、複数の被験者のデータを相対化することによって、概念の構造的な一般性を把握することが可能である。通常の面接法などでも、かなり多くの要因が引き出せるが、PACによって要因間の関係をも分析することが可能である。また、要因間の関係を分析するためにKJ法（川喜田、1967）などを用いることも可能であるが、KJ法ではカードの振り分け作業の途中で、ある程度カテゴリーが出来あがり、最後はその出来上がったカテゴリーにカードをあてはめてしまいがちになる。これに対し、PACではデンドログラムを析出し、面接を行う過程で初めて要因間の関係が分かるようになる。

第三に、通常の調査方法では、研究者は自分が関心のある事項を中心に被験者に質問する。つまり研究者自身の枠組みで調査を進めることになる。それに対し、PACは被験者に被験者自身の持つ枠組みで自由連想させる。クラスター分析の結果、析出されたデンドログラムを分析する過程で研究者は被験者の主観的認識を間主観化していく。

最後に、面接はデンドログラムを見ながらの作業であるので、被験者に危機感を感じさせることなく、自己開示を促しやすい。⁽⁶⁾

(2) 調査設定

調査は1996年3月に関西及び北海道で行った。被験者は以下二名の日本人である。

- ①被験者A—関西在住。40代前半の女性。主婦。過去10年間地域社会の中で在日華人（華僑を含む）との接触を持ち、華人を生活面で援助してきた。華人との意志疎通は日本語である。
- ②被験者B—北海道在住。20代前半の女性。大学生。過去1年間中華人

民共和国（以降中国と表記）東北部の外国語大学に留学した。日本語及び中国語のバイリンガルである。

(3) 手続き

『華人の面子』及び『日本人の面子』の特徴やイメージを思い浮かべる二種類の刺激文から連想された項目をカードに記入させた。そのカードを重要度順に並び換えさせ、その組み合わせの直感的イメージの類似度を、七段階で評定させた。その距離行列を、ワード法でクラスター分析しデンドログラムに析出した。各クラスター（以降CLと表記）のイメージやまとまっている理由を聞きながら、各CLを命名した。また、CL間の関係などについて質問したり、項目が単独で持つイメージを（+）、（-）、（0）で回答させた。

3. 結果及び考察⁽⁷⁾

(1) 華人の面子

①被験者Aの事例（図1参照）

〈項目数とイメージ〉

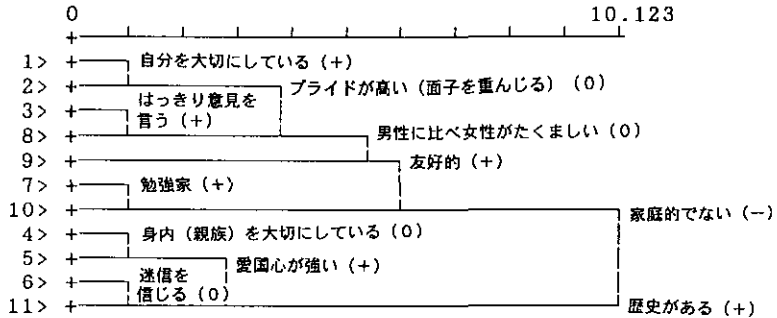
（+）が6項目、（-）が1項目、（0）が4項目で、華人の面子に関して全体としてプラスのイメージが強い。

〈被験者AによるCLの解釈〉

（CLごとの解釈）

CL1は「自分を大切にしている」から「家庭的でない」までの7項目：ここは、独立、自立しているっていう感じでまとまっているかしら。すごく自分を大切にしていると思うし、そうするには自分の意見を持ってなくちゃならない。プライドが高くなければ伸びないでしょ。今私が思い描いたのは〇〇さん（華人女性の名）のことだけど、××さん（華人男性の名）と比べるとたくましいって感じがするわね。日本だったら女性が男性を助けてという感じだけど、中国の人って自分で仕事を持ってるし。〇〇さんやその他の中国の人に接する前から女性は仕事を持っているっていうイメージがあるわね。ううん、中国の共産党のイメージがあ

図1：被験者Aのデンドログラム（華人の面子）
[左の数値は重要順]



るからかもしれないけど、社会的に女だから……というのがないでしょ。中国でも海外に出て、そういう勉強や仕事をしている人は一般的ではないのかもしれないけど。それに、私自身も日本人で仕事を持っている女性と接する機会が少ないせいもあるから余計こういうふうに思うのかもかもしれないけれど……。でもとにかく、向上心があるから海外に行っても常に前向きだし、外を理解しようとしているし、勉強家よね。

CL 2 は「身内 (親族) を大切にしている」から「歴史がある」までの 4 項目：ここは一言で言って中国の歴史かしらねえ。中国の人は迷信って言ったら悪いかしら……。そうね、例えば方角とか……。日本人にもあるけど、もっと縁起を担ぐでしょ。まあ外国に来てるから余計そうなのかもしれないけど、親や兄弟のことを常に考えているっていうか、結びつきが強いつて感じ。

(CL 間の比較)

CL 1 は努力して、自分が意識して持っているもので、CL 2 は意識はしていないもの、つまり持って生まれたものかしら。CL 1 があるのに、CL 2 のしがらみや慣習を打ち砕く部分があるように見えます。

(補足質問)

「プライド」：自分を信じる。自信を持ってやっていかなければならぬってことだわね。認められるまでは大変。

「友好的」：好奇心があるっていう感じ。

「家庭的でない」：(思い浮かべている個人が)子育てをしていないという事です。

〈被験者Aについての総合的解釈〉

被験者Aのデータに関して、以下の三点について考察する。まず、CL 1 は〈自立及び成長志向〉、CL 2 は〈ルーツのしがらみ〉とそれぞれ命名できよう。被験者Aが解釈したように、CL 1 と 2 は互いに対抗している。強い個を保持する土台にあるのは親族の結びつきを含めたしがらみの強さであり、強い伝統やしがらみに負けずに打破するには個の強さが必要だと言える。これは蔡(1995)の華人の自尊意識の「義務的自己」と「理想的自己」の対比に呼応していると考えられ、この点に関しては4の結論で再度論じることとする。

第二に、インタビュー後の談話から、このインタビューの過程で被験者Aが思い浮かべているのは台湾人女性であること、被験者Aははっきりと中国人、台湾人、香港人という区別を意識していることが分かった。にもかかわらず、中国、共産党、中国人などの言葉が頻出した。被験者Aはこれらの国々に関する政治的・社会的な側面での知識を持ちながらも、イメージとしてはこれらの国々が共有するものを意識していると考えられる。

第三に、被験者Aは思い浮かべている華人の女性について「男性に比べてたくましい」という印象を持っているようである。このことから、「女性よりも男性の方がたくましい」などという解釈をするのはあまりに短絡的である。これはタジフェル及びターナー (Tajfel, 1981; Turner, 1987) の社会的カテゴリー理論及び自己カテゴリー化理論、あるいは内藤(1997)が述べるようにPACによってどのカテゴリーがアクセスされたかと深く結びついていると考えられる。つまり、華人と接する際(特に思い浮かべている人)、これまで被験者が自身と相手のどのようなアイデンティティーを対照化してきたかによって引き出されるイメージは異なると思われる。被験者と被験者が対照化させている華人女性との関係において浮かび上がる差は、被験者自身が女性であることで、同性という共通項よりはむしろ日本人と華人との差として認識された。しかし、もし仮に華人男性と自己を対照化させる機会があった場合、そこに見ら

れる差は、日本人と華人との差としてよりもむしろ男性と女性の性差によると認識される可能性がある。

②被験者Bの事例 (図2参照)

〈項目数とイメージ〉

(+)が4項目、(-)が11項目、(0)が6項目で全体として華人の面子に関してマイナスのイメージが強い。

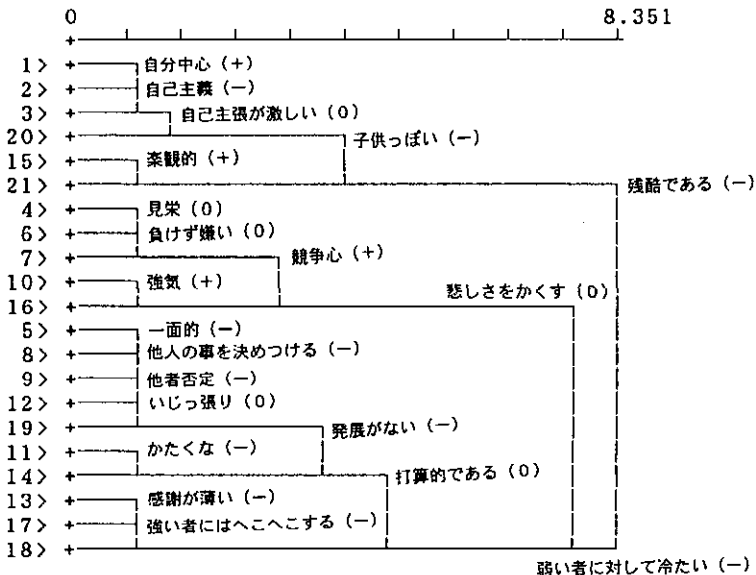
〈被験者BによるCLの解釈〉

(CLごとの解釈)

CL1は「自己中心」から「残酷である」までの6項目：とにかくここは、表面に出す、主張しないと物も得られないって感じです。そして、嬉しいとか悲しいとかをストレートに出しますね。凄く素直で、物の見

図2：被験者Bのデンドログラム (華人の面子)

[左の数値は重要順]



方が悲観的じゃないですよ。でも自分の主張を通すために、相手が困っても気にしないっていうのもあります。

CL2は「見栄」から「悲しさをかくす」までの5項目：この5項目から受けるイメージですか……一歩も後へは引かないって感じがします。とても見栄っ張りで、例えば子どもに千円とか..かなり高額のお年玉をあげたり、ゲームは必ずむこう（中国人のこと）が勝つまで続けるんですね。学生はいくら奨学金を貰えるかが成績にかかっているの、良い点を必死で取ろうとします。強気に出ないと駅に行っても切符一つ買えない、つまり損することになります。強気なのは特に女性かな？ 悲しいのは北の方で貧しい人かな。でもよく考えると、悲しいと思う自分が悲しいのかもしれないんですけど……。

CL3は「一面的」から「かたくな」までの6項目：このCLに現れていることは、これがなければもっと良くなるのについていう感じです。譲り合いがない。そう「お先にどうぞ」とはあまり言わない。南の方は言う人もいて驚いたんですけど。「ごめんなさい」も「ありがとう」もあまり言いませんし。一面的って言うか、狭くて融通がきかないっていうのかな。自分の考えていること以外は受け付けられないから、そうなると徹底した他者否定ですよ。それに、日本語の時間（被験者Bは留学先で日本語の助手をしていた）当てても、“わからないったらわからない”って言わんばかりで、頑な学生もいましたね。

CL4は「打算的である」から「弱い者に対して冷たい」までの4項目：ここは、強い人にはへこへこして弱い人には冷たいっていう感じ。そして貰うものを貰って「ありがとう」とは言わないってことだと思います。(CL間の比較)

CL1は中国人の面子の強さの基になっていて、皆が共通に持っているもの。CL2から4まではCL1が日常生活で現れてくる場面。北のイメージです。また教育の程度や外界との接触がある程、CL1みたいな面は薄れていくんだと思います。

(補足質問)

「残酷である」：自分の主張を通すためには相手を傷つけても平気かのように見える。例えば動物園に行った時、餌をあげる振りをして叩いて苛めたりしているのを見たから。それとか、自分が勝つまでは相手の都合

を気にせずにトランプをしようとし、相手に何を言っても傷つけているのかを考えもせずに主張すること。

「打算的である」：日本企業で働きたいから日本のビジネスマンに中国語を教えたがるなど。

「強い者にへこへこする」：面子を捨てているように見せて、面子を得ることを意図的に考えている。

「弱い者に対して冷たい」：人間は動物に、公安（警察）は労働者に対して冷たい。

〈被験者Bについての総合的解釈〉

CL1は〈自己主張・自己表現のストレートさ〉、CL2は〈能力主義・競争志向〉、CL3は〈停滞〉、CL4は〈報追求〉とそれぞれ命名した。晨(1995)によれば、報とは人脈を通じて相手から当然得るべきものを受けすることである。華人の面子は能力の評価に関わる場合に顕著に表出されることは末田(Sueda, 1995; 末田, 1997)の先行研究で指摘されている。ここでもそれが支持されていると同時に、能力志向のもう一つの側面が窺える。つまり、徹底した能力志向であるがために、強者は弱者に対しては極めて冷酷かつ残酷であり、弱者に対する非道徳的行為を正当化し得る。

また、前述の被験者A同様被験者Bも女性であり、中国人の女性を“強気”だと感じている。これも被験者Aと同様に、被験者Bがどのようなカテゴリーで自己と相手とを対照化させたかと深く関わっているように思える。

(2) 日本人の面子

①被験者Aの事例 (図3参照)

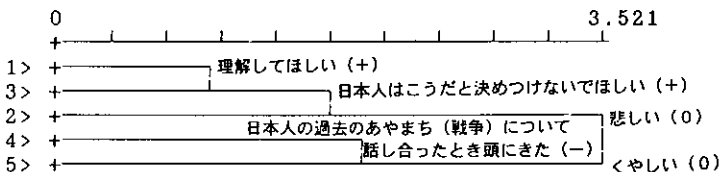
〈項目数とイメージ〉

(+)が2項目、(-)が1項目、(0)が2項目で、日本人の面子に関してプラス・マイナス同程度のイメージを持っている。

〈被験者AによるCLの解釈〉

(CLごとの解釈)

図 3 : 被験者 A のデンドログラム (日本人の面子)
[左の数値は重要順]



CL 1 は「理解してほしい」から「日本人はこうだと決めつけないでほしい」の 2 項目：ここは愛国心になるのかしら？ 勿論、こちらが直す部分が沢山あるんですけど、決めつけないでほしいし、理解して頂けたら日本人のイメージがよくなると思うんです。

CL 2 は「悲しい」から「くやしい」までの 3 項目：これはもうその話(戦争)が出たときに感じたことよね。悲しいし、悔しいし、戦争のことを言われたらもうどうしようもないのよね、日本人は。

(CL 間の比較)

CL 2 が感じたことで、CL 1 はこうして欲しいっていう願望じゃないかしら。

(補足質問)

「日本人はこうだと決めつけないでほしい」：固定観念をもたないで、もっといろいろな日本人がいることを分かってほしいと思うの。

<被験者 A についての総合的解釈>

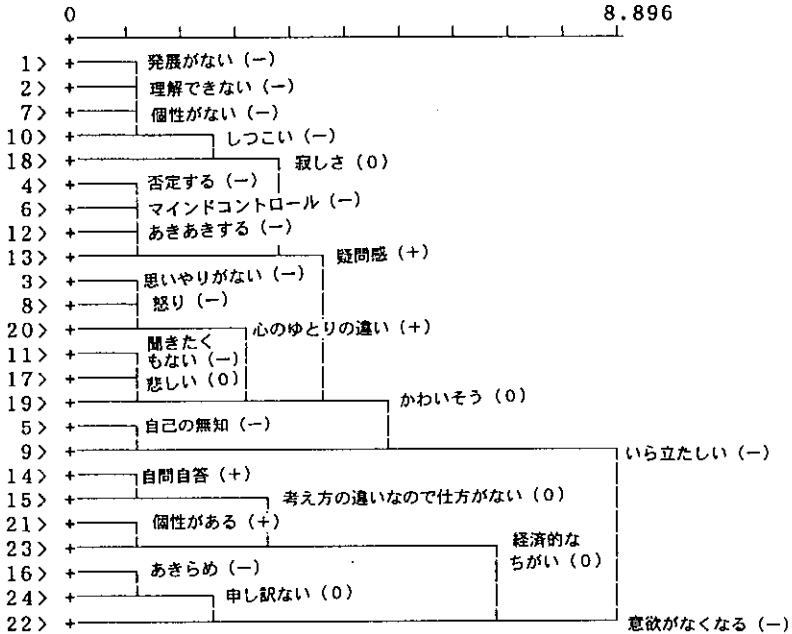
CL 1 を <理解への願望>、CL 2 を <戦争責任の重さ> と命名した。戦争という非道徳的かつ非人道的な行為を責められたことによって日本人としての面子は立たないと感じているということが窺える。

②被験者 B の事例 (図 4 参照)

<項目数とイメージ>

(+) が 4 項目、(-) が 14 項目、(0) が 6 項目で、日本人の面子に関してマイナスのイメージが強い。

図4：被験者Bのデンドログラム（日本人の面子）
 [左の数値は重要順]



〈被験者BによるCLの解釈〉

(CLごとの解釈)

CL1は「発展がない」から「かわいそう」までの15項目：ここは、戦争中の日本の行為についての相手（中国人）の反応を自分がどう感じたかっていうのでまとまっていると思います。皆同じことを同じように言うのにはびっくりしたって言うか、まるでマインド・コントロールされているように思いました。あまりにも個性がないし、個人として疑問を持たないのか？と疑問を持つ程でした。もう聞きたくないって感じでした。最後にはそのような考えしか持てないことをかわいそうにさえ思った程です。

CL2は「自己の無知」から「いら立たしい」の2項目：ここにはCL1で責められたり質問攻めにあって、答えられない自分に対しての苛立ち

が現れているんだと思います。

CL3は「自問自答」から「経済的な違い」までの4項目：CL2の後に、じゃあどうすればいいか考えているって感じです。

CL4は「あきらめ」から「意欲がなくなる」までの3項目：ここは「でもやっぱり自分ではコントロールできない」っていうあきらめが現れている感じです。自分自身が恵まれていることを申し訳ないと思うし、もう聞く意欲がなくなるって感じです。

(CL間の比較)

CL1がカーッと頭に来て、他人を非難してる感じで、CL2から4は冷却して頭で考えているって感じです。

(補足質問)

「個性がない」：例外はほとんどなく、皆が皆どこでも同じことを同じように言うってことです。

「個性がある」：自分の中で考えているってということです。

<被験者Bについての総合的解釈>

CL1を<ワンパターンの言動に対する怒り>と命名した。CL2から4はまとめてCL1に対する被験者の反応であるが、CL2<自己否定のプロセス>→CL3<解決の糸口探し>→CL4<無力さの認識・無気力>という過程を経ている。被験者Aと同様に、戦争が話題になった場合に日本人として自己の面子に危機感を感じている。被験者Bが中国に滞在した時、うんざりする程、どこへ行っても日本の戦争責任に関することが話題となった。そのことで、被験者Bはたとえ自分自身が直接的な加害者でなくても、罪の意識や恥じる気持ち⁽⁸⁾を持つ。しかしそれだけでなく、被験者Bと中国人との間に、農(1995)の述べるような報の原理があったとも考えられる。同氏によれば、ごく一般の中国人は日本に対して、戦争賠償金の放棄など既に多大な「恩」を施していると考え、その「恩」に対する「報」を先進国としての日本あるいは日本人が与えて当然と思っているという。被験者Bが出会った中国人達は意識的か無意識的にか、ある種の「恩」に対する「報」を主張したとも考えられる。

4. 結 論

今回 PAC を用いて被験者の枠組みから事象をとらえる試みによって、日本人二名のデータを中心に分析してきた。以下の五点にまとめてみたい。

まず、蔡 (1995) は儒教思想に基づく華人の自尊意識としての面子を、親族に対する義務を果たそうとする「義務的自己」と、自分の選択によって自己実現しようとする「理想的自己」の統合の過程としている。図1ではこれが構造的に示されている。義務的自己が確固としたものでなければ、自発的な自己(理想的自己)も生じない。そして、確固とした義務的自己に負けずに、ある意味で打ち破ることによって自発的な自己が達成される。故に、両者は天秤のようにバランスによって成り立つものと言える。このような華人の親族感覚に対する理解がないと、ビジネスの場においても教育の場においても、対人摩擦が生じる可能性が考えられる。

第二に、二名の被験者が共通に華人との関わりで自己の面子を潰されたと感じたのは、戦争責任に関わることであった。非道徳的かつ非人道的な行為を責められる、いわば恥の意識にさらされることによって面子は一切成り立たない。つまり、いくら個人として社会的評判が高くても(面子が大きくても)、人間として根幹にあるものを否定されることによって面子まで潰されてしまう。もともと中国では、面子(*mien-tzu*)と対になるものとして廉恥心に関わる臉(*lien*)⁽⁹⁾があった。この二つの関係については、研究者の中でも議論が分かれるところであり、二つを対になるものとして対照化させている研究者もいれば(例: Bond & Hwang, 1986; Hu, 1944)、この二つの区別は明白につけられるものではないとする研究者もいる(例: 園田, 1995)。また、翟 (1995) は臉と面子を異なる次元でとらえ、二次元モデルを呈示している。今回のデータから、これらのモデルを裏付けることも、新たなモデルを呈示することもできないが、それは今後の課題としたい。また、華人の面子と恥の関係については勿論のこと、日本及び他国における面子と恥の関係について今後も研究していく必要がある。

第三に、第二点に深く関わるが、面子という概念は、晨 (1995) の論

ずる「報」という原理に基づき、より体系的に論じられるべきであろう。この枠組みから面子という概念をモデル化する試みもなされており、例えば黄(1988)は社会的交換理論に基づき面子をモデル化し、園田(1995)はそのモデルを参考にし、面子を関係(グアンシー)や人情という概念と結び付けて論じている。今後、第二点で指摘したように、臉と面子との関係と「報」の原理などを統合するマクロなモデル構築が必要であろう。

第四に、面子を大きくし、得られる所から得るべきものを得るために華人社会は徹底した能力志向となることが今回の調査によっても支持された。つまり、この能力志向の下では、自己の限界を他者に示すことは決してない。同時に、能力のない者に対しては、残酷なまでに冷たい能力志向の側面も、今回の調査で浮き彫りになった。この点は、残留婦人を含む中国帰国者に対する自立適応援助の問題等(中国帰国者定着促進センター教務課講師会, 1995)を考える際に重要であると考えられる。彼らの心理的適応の問題が面子とどう関わるかについて探究する必要があるであろう。

最後に、今回のテーマだけに限らないが、PACで調査をすることによって被験者のどの部分のアイデンティティがアクセスされているかが引き出されてくる項目からも推察できる。また、研究者と被験者がどのような関係にあるかなども深く関わる。PACから得られるデータをどのように解釈するか、分析するかについては細心の注意が必要であるが、注意深く得られたデータを積み重ねること、そしてそのデータを整理することによって、かなり豊かな知識を得ることができると思われる。

[註]

- (1) 本稿は異文化間教育学会第17回大会(1996年)で発表したものを土台にした。本稿を書くにあたって、またPAC分析技法を学ぶ上で、信州大学の内藤哲雄先生には丁寧なご指導を頂いた。改めてお礼を申し上げます。
- (2) この記述の仕方は法務省入国管理局「平成9年版在留外国人統計」の記述の仕方に従った。
- (3) 華人とはここでは中華人民共和国、台湾、香港など中華文化を共有

する人々とする。本調査が関係するのは特に中華人民共和国及び台湾であり、両者を「華人」と一般化するつもりはない。ここでは両者が共有するものを「華人」と表現したまでに過ぎない。

- (4) フェイスという概念の起源は中国にあり、中国のフェイスの概念には二つの側面があり、そのうちの一つが面子 (*mien-tzu*) だと考えられている。もう一つは道徳的規範の遵守に関わる臉 (*lien*) である (例: Bond & Hwang, 1986, 1996)。臉は日本語で「恥」にあたると思った。また、ここで述べている社会から得る評判とは、肯定的な評判も否定的な評判も含むし、社会な影響力が肯定的に働く場合も否定的に作用する場合もあると考える。この二面性は面子がその基盤としている儒教自体の持つ二面性と呼应していると両筆者は考える。
- (5) 晨 (1995) によれば、中国の儒教が「敬」を重視する学問であるのに対し、日本では「誠」が重視されているという。特に、伊藤仁斎以来、清く、正しく、素直な心で自己及び他者に臨む姿勢が大切だとされる。
- (6) PAC (内藤, 1993, 1997) では他のどの調査方法においてもそうであるように、倫理的な側面に十分配慮がなされた上で進められる。特に以下の四点に研究者は留意しなければならない。1) 調査を始める前にも、調査のどの過程においても調査を中断する権利が被験者にはあることを伝えておく。2) テープレコーダーを用いる際にも被験者に許可を得るばかりでなく、被験者がテープレコーダーを途中で止めて欲しい場合直ちに止める。3) 調査の過程で、研究者は被験者の言語及び非言語サインを敏感に察知するよう努力する。PAC では被験者が感じたり考えたりする過程で研究者は“待つ”ようにしなければならないが、被験者が待つてほしくない、つまりこれ以上そのことを聞かれたくないというサインを発していると判断した場合には、速やかに話題を展開すべきである。4) 連想項目に個人名や被験者の正体がわかるような固有名詞が出てきた場合には、その部分を○×などで表す。
- (7) この部分の記述の仕方は PAC の考案者である信州大学の内藤先生の記述の仕方をモデルとさせて頂いた。紙面の制約は勿論考慮したが、被験者の用いた生の言葉をかなり活かしている。他の記述の仕方では、PAC の持ち味がなかなか表現できない。
- (8) やや乱暴であるが倫理観に関わるものとして、ここでは罪の意識を「恥じる気持ち」という表現を用いた。

(9) 註(4)を参照のこと。

【引用文献】

- Bond, M., & Hwang, K, 1986, "The social psychology of Chinese people." In M. Bond, (ed.), *The psychology of the Chinese*, Hong Kong: Oxford University Press, pp.213-266.
- Bond, M., & Hwang, K, 1996, *The handbook of Chinese psychology*, Hong Kong: Oxford University Press.
- 晨光, 1995, 「報」と「誠」のコミュニケーション—中国と日本の間における不信感の分析. 異文化コミュニケーション研究 (神田外語大学異文化コミュニケーション研究所), 8, 169-184.
- Chen, V., & Pearce, W. B., 1995, "Even if a thing of beauty, can a case study be a joy forever?: A social constructionist approach to theory and research," in W. Leeds-Hurwitz, (ed.), *Social approaches to communication*, 135-154. New York, NY: Gilford Press.
- 中国帰国者定着促進センター教務課講師会, 1995, 同声・同気, 3 (6月30日).
- 法務省, 1996, 『平成9年版在留外国人統計』法務省入国管理局.
- Hu, H. C., 1944, The Chinese concept of "face". *American Anthropologist*, 46, 45-64.
- 黄光國, 1988, 『中國人的權力遊戲』巨流圖書公司.
- 井上忠司, 1977, 『「世間体」の構造』NHK ブックス.
- 岩男寿美子・萩原滋, 1987, 『留学生が見た日本—10年目の魅力と批判—』サイマル出版会.
- 岩男寿美子・萩原滋, 1988, 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析』剋草書房.
- 川喜田二郎, 1967, 『発想法』中央口論社.
- 馬越徹, 1993, 留学生. 中野秀一郎・今津高孝次郎 (編) 『エスニシティの社会学』世界思想社, 48-65.
- 内藤哲雄, 1993, 個人別態度構造の分析. 人文科学論集 (信州大学人文学部), 27, 43-69.
- 内藤哲雄, 1997, PAC 分析実践法入門: 個を科学する新技法への招待, ナカニシヤ出版.
- 園田茂人, 1994, 幻想としての「同文同種」—日中合弁事業が提起するもの—. 中央口論 (7月号臨時増刊), 214-223.

- 園田茂人, 1995, 中国社会の「関係主義」的構成. 現代中国, 69, 50-65.
- Sueda, K. 1995, Differences in the perception of face: Chinese *mien-tzu* and Japanese *mentsu*. *World Communication*, 24, 23-31.
- 末田清子, 1997, 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較研究: 量的分析の展開 (その2). 北星論集 (北星学園大学文学部紀要), 34, 1-24.
- Tajfel, H., 1981, *Human groups & social categories: Studies in social psychology*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 高井次郎, 1989, 在日外国人留学生の適応研究の総括. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 36, 139-147.
- 蔡小瑛, 1995, “面子” (MIEN TZU) に関する研究—家を背負った個人の自尊意識の形成—その1. 大阪大学教育心理学年報, 4, 41-50
- Turner, J. C., 1987, *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, UK: Blackwell Publishers.
- 山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛, 1997, アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割. 教育心理学研究, 45, 119-128.
- 翟学偉, 1995, 『中國人的臉面觀』台北桂冠圖書公司出版.

北星学園大学文学部 北星論集第35号 正誤表

頁・行目	誤	正
64頁23行目	るによって	ることによって
188頁1行目	「屋守」	「屋守」
186頁1行目 (折り込み)	笑話__	笑話性
186頁1行目 (折り込み)	現実__	現実性